小竹乃新堂

中

ちくのしら葉中の考目録

三山歌　　耳我嶺

千向草　　著聞集十訓抄

濃　　犢鼻　四辻

心ふかくそいとはるるきさらぎ

ふかきをぬすむ市ちかるる

歌文しらをとはるる

楽山義　附双桂舎記　　楽毎抄十　附哥集成

移代公　　のうぶ

曜日文庫
岡田眞之藏書

うとふ
蝦
奥山評
大江山
霍公鳥
せみ 附舊作文
和須ら為く
たぐくら

小竹の下葉中の巻

三山歌

萬葉集一巻中大兄三山歌 高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎神代従如此爾有良之古昔母然爾有許曽虚蟬毛嬬乎相格良思吉 反歌 高山與耳梨山與相之時立見爾来之伊奈美国波良 渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜清明己曽

代匹記弁のるかぐ山とみゝなし
うねびの袴しさ山と耳梨山と合戦して
あらそひありてある男ふられける

今たる香具(カグ)山畝傍と耳なし山とがいさかひ
をん山ハ鍾(シヒ)くるまや女なるとハいへるにとかく
つまてあらそひしといふ山に又さに足(タラ)ぬ中(ナカ)さるゝ
かれてやさきハ雄々しきの花にハあらで雲根火
を愛(ヨシ)とのみいひて香山に女山にしてかぐ山を
耳梨山に二(フタ)男山いどみあらそひけるやうなる也
されバ是三山の耳山畝傍耳梨山與相闘
いふを諺のごとく男女の争ひにあらずして二つの
男山の争ひにて相闘の戦ひとなりてやけむりにそ
出雲国阿菩大神争ひを諫めんとあがりて此處

まで来りける播磨風土記の説もさにかはらぬ
びられさて又此の渡津海の神ハ(?)にて右一首歌
今案不似反歌也とくとあらぞくとくいへるおもし
上とも播磨國揖保郡にて此ころの神の神集
て上下つるをたるのみしをきてうみのへふ
淀おしてこれも申し侍るをみそしつれなど
あれどこハ我三山とあらそひてあやしきとおぼしめして
らんまうしけれとも天下の御神のことくにはから
もとつくかりのそとのへつれてたわむるの
浜おとすしく妨(カゲ)なし右の説ハ今の渡津海の

[illegible]

身我嶺

同一巻天皇御製歌　三芳野ノ之耳我嶺爾時無曽雪者
落家留間無曽雨者零計類具雪乃時無如
其雨乃間無如隈毛不落思乍叙来具山道乎
或本歌云　世間製れの隈もわらびといつと代見花
ちるふみちのまくとをとつことてはなく
ちるはなのあるきくまををしいるびも
なてうるをとなどうへあるいぬうしそ

拾穂抄云　書紀を考るに芳野とあるこの芳野とあるこの
たるをとはるまく思ふ世をとのの心をとべとはれ
ふるべくおもひゆるつきて松今をしいる
ほどもかしこ入るみちのほどは製れたん
ふる雨雪のけをくに同をさるくるのまこ
まをしくあをとるびつるをとのほ心を隈
ちらびをくしくるのの孫うをそのをうをも世
は製れん耳我嶺爾可無ると中玉抄云
[illegible]
しををや

手向草

同一巻（幸千紀伊国時川島皇子作歌或云山上臣憶良作）白浪乃濱松之枝乃手向草幾代左右二賀年乃經去良武（一云年者經爾訓武）

世の白浪の濱行ごえ左のつきまもるとや
麻名の枝あるまつきて考ふ白神乃ゝ白良乃ゝ
と語まくらなんとつくるを思ふ解ふくゝ
えんも浪く白浪の濱行ごえとづけるもあづつ。
なきまつ堀ふ所のまつ白はまてはに
波のまつ濱とつづきを思きてかくづけ
がつりてなきん今とも美九（重出白那弥之とゝ作字）

とんハ浪ぶくなるべ一宮もちるもれハ八ゝ方
神のゆゝの幣都那（ミソニ）美曽ホ双伎（ウニ）宇五ハ杜逢信
殘脱棄也と仰ぎ法やまてはのる砌ぶくを
いつべきとまつ浪砌てハうづあ砌
うの白波の濱行ごえ枝とも思ふ
花のおく風ふ信のいつもあるとく
まうく英をまつあ杜ホ麻ホ同のう
ぶしうをうるゆをえ白波の言
とくおまてかくづけがつりてちうなん今
いうはうもうけがうき 論なり宮長

たゞ此の言を類(タグヒ)とやくしていはゞかきハ淤岐都(オキツ)
登理(トリ)、牟那美流登岐(ムナミルトキ)、波多多藝母(ハタタギモ)、許禮婆布(コレハフ)
佐波受(サハズ)、幣都那美(ヘツナミ)、曽邇奴岐宇弖(ソニヌギウテ)、などとありて
へつなみハ四言の句皆辞の格也なりけれバなる
とつゞけてよむべきうたハこのみにかぎるのお
ほかの例なきよみつべし 宣長古事記傳此歌のほく那美ハ那岐の誤にてかくハ浪のこゝろなれどよみたる例なし
那美ハ胸とて即浪の意にいひかけて縁とこゝろえてみれどもすべて従ふべし 又古作りたる花の風にたゞよふの
いふハとあるは風にまのよふすといふをもて
まゐりてかくいへるなれば妙なれ此浪の清くは
松ねがふのたくさえてられはしての句まで(?)

濱松が根乃と詠めて巻九松之木とよめるをたぐひには
松之本(ガホ)とあるをもならべくは根と枝と注ぐる也とて
さて云のこゝろハいとおしつてきよみて何ふの
濱松がえまで何を何せるを縁りて傳へいふを
やまて松ハ松をたてることあるべし濱松のなは
いくそのよゝのつめんとよみはへりたなれどさて
げにはいかばかりんすんそをせてよ後人をいさめん
そのかの何を松のまとへいふぎをせんも
いとこのこゝろしくやよりてをするこゝに上巻よ
見結松(ミニ結テ松ヲ)哀咽歌とあるなのこゝろばえて 解ス白...

[illegible]人など役有間皇子の故事とおぼしきの
[illegible]やあんけるもなでハるもなどを
[illegible]けなるもとまろ[illegible]
ハ今ものもてを行ゑをおひまのもと
やどてもの[illegible]ハるもあ人行ゑを結
ぶ類ひくるうるれしるのもハもて
[illegible]ゑもとゑれどうのまるあぶ
とちしまの河のもるどなんるやどを留
かもちんるなぶるれんをるるう
んるゆるも碧白乃とるんもを留

いづれく語なるうん

著聞集十訓抄

たゝ著聞集と十訓抄の二書同話を載れ
ゝ多くあるもかしを遠ものもし
記録などふるもてはるんまかくそは
ず合まぐるがいかゝ行まれほをるる先
なるとをまるうしるるのるるふ十訓
抄自序の末に建也日本のみをるまるる
うしかるるるる所ハ著聞集ハ日建也
著るれるる日序跋まるれば十訓抄ハ

二まきしるしたまへるは一二の巻とおなじ
看聞集のことく古く十訓抄ハ後のものにて
これ見合せたてまつらバ見しるべきなり中に
いふかしき一つの事ハ見ゆめれど看聞
集のことすぐれて見ゆるのくなし一統乃うち
まづてあれしも十訓抄ハまさしくすゝめたうべき滅
しける心ざしくて十巻の篇をおもふかはじめて
浄土の何るなどとおぼしめすなどいかのや
やはらかなれどまこと後世の事も打明かぬ
悲しくはべれや

みそうづ
古事談ニ九條民部卿顕頼辨官之時有公事之日
早且参陣衛及深更之間已臨飢仍於床子座喚
雑色令具由可煩之雑色黒器ニふたのきみそ
うづの毛立たる一盃と署預の焼たる二筋とを
折来與之云々黒器物とハひきいれて侍る吸
ものにて今ぞ人のうちまかせていふとがめの
ようなるべし 按師光大外記云床子座ハ腋陣にも
加然事無憚之所云々 看聞集ニ保ひの様秋
のほうりて田楽て云ふ所そふるふいひとけ

つらうとあれば何といふ事もなかりければ法師
このいふなりといひけるにあるじは法師この様
そのみゝづをくはせられければみなわらひける
「あつしはしらのはしりみゝづをもて
なりけるとぞ　本草木散
今の世雑炊などのおもやゆの古俗國などにて雑
炊をおみそうといふかし此俗にはあらじとぞ毎
又田舎にゆきのかみ房といふものゝある人
に今きゝてあつくるとたくさんかきければ

今はかゆずしもあへしといふ厠あるの比
に料紙をとふ用ふるしいへばけんかいはりん
をけとうへしのりんとひし不の御ゝとぞすて
こゝおとも紙みてうづゝみふつまもてはやず
いづしてはべきといへりけるに紙みてうづ
紙雑炊としてくひけりといへるなるべし　料紙の上
厠あるの比用ふりといふいしくもあてぬぐる
ことしきこえけるといへるし

犢鼻　四辻

若闘集に坊つ大納言忠信卿の歌ありて一首

ころのりて彌と逐て淀門に出入して小保
のめでたかりしとなるにやゝのまさめや
かゝりてしかされどふんかしれぬけるにく又圖出
く強人大力の家にて畠山庄司次郎ともあと
いへる大力との相撲ありしをみれハ庭に床子あり
尻かけてゐたるをれもさらにさふされたまへてかゝる
古かりけるしめりて今俗に褌(フトシ)をかくといふ圖ハ
これやこもまた圖書に中納言伊勢なる物語くるとあ
といふ相撲と云今はいさゝかの文に物語くるにや
四(ミツ)辻をとりて引へつゝしいれりくるにはとにもされ

めぐらせるへてやがてかなづつとともみわかりて
今犢鼻の尻のよりて結びなるにとゝうひ結ぶ
三結(ミツユヒ)の着けあるべしさて結目(ユヒメ)ハ上に角(ツノ)出るハ
四辻ともいふべく只中よりひのあふ三結(ミツヒ)とい
ひしかれバ今いふ四辻とかりてしいふ何
りしげや當時の犢鼻のくるハうちの脇には
あらしるものありしなるべし裸(ハダカ)にて相撲とるす
がたも物語にもみえたり

纏

圖書に坊の法くまれめしつる荷もちの師を何

うべきすゑてめしたる何の仰せ事の有て　あさな
しきに大假字(カナ)にて物かきたまふことはいとめ
ずらしけれは見る人まれまれにぞめでたかるべし
ともとこの文のことなどあやしきさまにかはりいふ
かやうなる狼籍の伺ひばかりにてめしよせてせめ
られる何まで申すべきやうかは候へ今御最(ゴサイ)
おもはれけてもいへば前にて出しまゐらするやうなる
しきそれにてもよくとよく見ばつゞきもけやすく
なり假字ハよみにくしと見ゆるもあれど可笑(ヲカシ)きまゝ
しとありここハ此節の事を便(ベキ)ともかく

こゝにいふまでもなかりしかど男女交合すり
うちとけてものいひかはしけし次の條ぞ日經の花也
又兵庫介則家といふもしゆうきとのらが小松にて
うちけなる女と寝にしけると傍輩ども
笑ひて小松まきしくといひけるにより小松
とまぬのうらひすると字(アザナ)してよびし又周防の
くふしたる猿といふを上りてかゝる人つらひ
なかりしを此かれがあはおもとといひならはすの
わらのそへて女きほどのすみて化粧の
母もてゆすのそて婦ありかゝく母であまさせあへ

うへに文字ある發音にてと本性は眠と
知らるゝをかなに發音に本性の眞字への
伊ひたるやうはかならずよるて少神にやくえ
まそつを入れて本性は眠めおやまけりと
たあまてしるて極とのがれば本性とりもあ
へば篇の中より發音めも𫝶んまけくとぞ
いたくとありこ爲日本やさて皆くは纏寐(ネキヌ)る
ことにて古事記沼河日賣哥麻多麻傳多麻傳佐斯麻
岐(キ)云々又大雀命御哥阿比麻久良麻久などそこの書紀
萬葉等によりたくさんくえたる讀みあらば投け

ほまでも皆同じのこえしなり
かことといふ詞
かことは借言(カリコト)の省(ハブ)けて他物(コトモノ)を詞(コトバ)に借(カル)也世人の
集山田こそ今はつくるとちるものゝことは風にあはせ
けるかんなふ大田こそ作る也それは物のちるはと
まかれ何をなるを風のめけにとやよふ風にあ
とれ令負(オフセ)せとくそまて花風と詞(コトバ)く借(カ)るさるにて
いづれのことも皆をしさてかゝることといひさるにて
いふはかことを令働(ハタラカセ)て いふて獨言(ヒトリゴト)を獨(ヒトリ)ごち
獨ごちて いふ目にほかにかこつけといふも借言(カコ)

附なりおもてを浜の伝ふかうの懸詫て言
を累さし言てかくかうけごとをいふそく
とあるにちまもるびに伝ざるもいとうもつき
仰らさそえうをほのく恨のとまを浜ら
いふべるこ示恨ときちなどいふ豆も恨と
あるからちをせなどまるひべるをひとう
ちしらるる伝ふ

心おもるべてひなしらるる家

萬葉集十六巻 德積親家爾有之攫爾鏁刺藏
而師慈乃奴之東見懸而古今集 憶四月貫之

行ふらうる心ふふらひさどくあわれをぞみる秋
集 秋下 秋のつきしかりえやくもみちをれるかげ
えてわるれ古今 恨秋月のくとうきくべき
ちみちをとるあのれ月

ほふはるびさらる

春ふく集 ぶらくけむをんぎものゆくをきく
いしやらまうしるるあのるるやるふ
おのやりびれをなるるなくなるみんは
而哉猶八將退不近道之間辛煩參来而又同七轉
如是爲而也尚哉將老三雪零大荒木野之小竹爾

不有九二とあるはおなじ心にて今同じこゝろを字も
の詞はものをくらぶるのことばにかはれりやと
いふみて一つをはぶくに一つの格をして古今集よ
りこなたは此格なしといふ今はたゞ不
詞字のかさなるとてやすく二つかさなれるにのごとし
うらみれるはいとあやしつるしおのづのこゝろひ
ありて動くべきことの詞のつまかひかはれり
同じきをや格はあれどこゝ同じ集敷島にも絡
のせきといふのうへやかやうなるのつまげる
らんなどもありてやかぎのなるべし 萬葉集 三

刑部垂麿 馬莫疾 莫行氣並而見氐毛和我歸志
賀爾安良七國 とあるも二つの莫なりしも同格なり
てあるしにきて又赤人集 みやこへくだりにしころ
いひつと申ていとくはしくのなみなれつる乃
くだりきちに依りこのよき人のいはとやとめ
とりつまるなどあるもおなじのひゞきするなる
似つるいづれも然ることなるべし
　欲見をば隱せる
袋草紙云 又歌ヲ詠ニ吾事ヲ今殿下ニ俊頼朝臣詠レ
卯花ヲ云 卯花のふさづゝもゆかしき御かゞき

孫ならしもうろくさ佐署不書シテ献之人々奇思
之處其名載二歌中一ニテ是獨歩之時、変也とあり
今ならつくやく源順集寄又庚申、歌、和ヲ、
のたてく今のいとへとのちの人をみてを出さる
してまらハ地ちどふちどふなりしあるを似ちち

樂山義

三戸安久（俗孫楚早）ハ俗中田八田マ氏の男ニて
同國野方なる三戸氏ゟ出たり信濃の
信濃山と号ふ世ぬくたくを心ありて
ちぐらひちうかくたく人のみをを

しまぬちうと今りけるうと歌をも舞て世人
もほめうまれり時ちどく人形のもとの
ものして行ぶ仏などやうのやどりぬつて
ちづちびほみちのほもれけるの命ハ信
なりてたくを心ひ命をを一日ハのれ
信るものつづくを命心ぐ人と信ハ
もうもと名聞うあびをれぶあるぐら書籍あまる
ちみちのをちりてのうちるけぐちあびくを心
を行とひ出るものうてせ中のちりかくうり
まうひうれくけうと人みの月のを人とれりて

なごくうのわくれ四とといひてなくじなんぞの
ふかけるくしひくぞつくなくもくあまし
四といくしんいろ国をしひて汨しくた
ぞのうみたいまりくしんといへるをかくく伝
出くんばるおかうふづまくまくけたいつど
きくくぞのたくみてんくいくれまくりくみ
くどのてくたくのきくあくくたくまくく立音
ちくつくんみ五めりたくこなまえのふみく
くてくみ作十二四ちまくこいつぞりくくぞ始
ふくるくるのきくまぞ一りくらびくみくづけれ

ふるまくに仏七八四ごう同の称名七八ちくく及
ごくくけくくりめくくくたおのきくをくるくくくの
ましくまぶいくぞくれくぞ神くきくのぞをめき
出てくをおくをくくくくんの心ぞいかか
なくぐくくくぶくりのいくるゆくくえ果くめくぐく
言葉屋けるれくなくくひくくるなの
くくのもくびくくみのきくと名くりくりばかくく
ひくえ一冊トギのれげめくがくくくで知ちくる
今くれぐ中のくくまぞくてかぐゆくの二十そ汁
とくくふ茅ぐこはけるのくくくびみのくくあぐひ

[illegible]人[illegible]ある人どもの涙く
[illegible]ものとハおもふらのふらうぬら
もいろゐあげてらく人[illegible]
[illegible]めけるのとばを出る給を
さてつぎいんこうのるをもとめうとかぐ
[illegible]人しをものるれ四十けハいへちをいら
もおげあをもげさけすぐてをるんや
いをれををハあのの山系といふのを
えをへをなんひしハけるの山むをうを
ををへるをうをうをて詩をしもちてあを

[illegible]ふい集をとのをえをれををにみづを
[illegible]ををををるをもををうて西行乃をを
あをぐゆを月むの二つみを人ををつぐふす
とぐ人をのなをびつぐををいををを系
とぐふ人をハえをハをををををづれね
ををもの命ぐもあをををををのををびハゆも
書あををえをををををびををををを怪をべを
ををぐををををををづしまづて山をのあを雪猛ふ
つし通ハうの仏縁入道頼義を家道世のを仏を
我往生極楽を望決定可果遂勇猛強威を

心昔衣河之館にありしさんと思之時に不違と
いひて果して正念往生なりしとなむかたりつため
こそし
かゝる秋月づかりて
ふかれそふみねのあらしに秋月ほかげしく涼しかりけり
嵐
かきくもる程もなくそらの風のおと
冬月
みるもしらめくゆきのよの冬の月
まめつしめけるしきりなるに

とふりもきのつもふる宿のあるはあめのぞ風のおと
宿りづくつゆも行きて
山ぶしの旅まくらへし花染のころもの袂
夜時雨
よもすがらはしりゆくやどを里をしらずふるのしぐれ
しぐれ
またのあとをゆきてみよしぐれは風にさそはれて山のあなた
風のあとそらにゆきてはるかなる松の色のこゝろ
らふらひて「うれしさのこゝろもなし人の
心のおくやのぞきつるとぞいひしうる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月と

しくもれる月みるやこの人なれば

[illegible]月ぞ中山なる姿井ぬぐりとと

[illegible]

夕づくよみ四のみくにのげにゆるぐ[illegible]

[illegible]わが[illegible]

かけとひとれば

[illegible]

[illegible]

[illegible]

石の人をのづからとなりて乱れ
れ出でたるとあり。ことばの乱れ
りとりてみるに、やまとの双極合記
のしづ人どるそうづかとつづけ
ゝまあしこ
人をば人をこそ人をあがひとと
ごろもとりつぶの人あるこのゆまれの双極合
ゝてみまもをこそいづやみまれまるて
みどの役罵ゝん半くしの雪ゝしゝば
なまゝの陽ゝんどちうづをせるふしり

とみゆるもゝてゝゝゝはこれてゝしあるてゝ
丘谷のかすてとかるゝるゝゝりゝ
ゝゝやゝゝゝりせのゝゝのゝゝゆづひ
ゝれとゝゝゝれゝゝゝれゝゝゝゝゝゝ
やどゝゝのゝゝりをゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝてゝかゝれゝのゝゝれゝゝのゝゝゝ
ゝつゝてゝとゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝ
でゝゝゝゝゝゝゝんぬゝれゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三月のはつかなん

樂翁居士

樂翁居士ハ氏うして名ハ立方 伊孫 播古 とぞ
ゐる故郷伊予ものたゞ人なれ共学問ゆゑ
なるあるべしてらうづ心あるまてらくみうれ
ども一へ世人のもてらひのうへなどもこゝかほとふ
のごめきうるもの 今世うへけるあるとうちき
つうあるかぐらも書むことをめてや和漢
こゝをぞこれうと漢学ハ西山拙斎先生の門人
わかハこゝめ玉ふ軒 澄月 吐屑庵 為延 三人
ゐうてそのゐたるの技藝あるも

いてはうこゝ中こゝ囲碁かゝうこゝすぐれてあハ
上ものうし行ふべきものやうれらるを
のほくゝ心せとゝ拳をぶうこゝうべ
ゐるあるひるうこゝのうづき初うある
いうもかへるくゐぶこゝ行ぶこゝもの和
ふうん月
あひうるのて心せゆくゐのうあるをこゝぶこゝ
旅伯
毋人こゝづこゝうあるこゝへうこゝ
うこゝあるこゝのうかゐるこゝあるこゝ

海四季

あめのみそらかすみわたれる人もなし
なつ雨
月うぐとめぐりあひてみるものは
山ほとゝぎす
いづくにかたちかくしてなくこえ
秋
山もとのあきのゆふぐれ
晩待
やまでらのかねのこゑ

跋

樵夫のおのがつかのまもまどのうちにたちこめてうちわすれたるひかれ過こしまくらのうへにうぐひすのこゑ
うぐひすのこゑ
いとやすくめをあけてみるものは

なりてうつぐ人数もかぎりあるに
なりゆくまゝにたのもしうつぐのこ
るたんうちはけるもとゞのおの
ものゝきこゝろにまかせたるの人
ぞこゝろのおもむきをいるるとしそ
うせもひあらはつゞけもたるべき
ものゝかうるべき太平の御めぐみ
ほぐおの庶うまうの人のこゝろ
ぐひゝなどかうていぞおぐ平生と
のふいゝうつゝしみてゆくこゝ

なるめぐくおしのもとあつまりて
ちひろの命をふかいでゝかのうる
うちえうりてゆくに都をぶひあそ
びほのすをこゝみむこゝの月れ
しろくぐみのこゝろれて後さ人
ぐうぐゝれんうてゝ月のこゝの地
のこゝにもひらてゝ風をぐきゝ多山
亭のこゝみかもたちりぬ風乃
かゝくきあつるうるうぐいうみまれ
こゝるこゝなこゝうこゝ風のこゝ
ものゝ

あるもなきことなれども
うたがふべきものなるべしとぞ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

なぎさの向こうはたちまちとうくもりて
みるもなかぬいろなれといへんこちせ
らるるもどうのうちにみえるは紙こさ人ぐひ
わたるうかまてうるうたのうれなたた
そびあるくとうけてもたびをを
月のうらのくうとありひうとかきうの人の山人
いわたりやしんん

うるそび

今八月せをどりのうれ伊ふのををうう
あうびうらんでうみなぐちの人をうたま

ままでめづさすりぐりくりこは風ふ形ぐ
いふをとらぎゆくく用こ風はあくくなりあまぐ
うるびやいふ様こあまちうこあふ家
なぐあなうそぐちひうたみやうあふ蛙ま
ぎとやうしいんうのりあれはもむう
こまてやうしいほのくなうほどなぐれ
かとなまて人をうかうを人をあわり
くうとあまりをきうぐうふてふ人ふの人
ちうびうれどうぐやうて風ふいまと海
部ううぐわづうちのちたちまん みこうぐの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いのちをすてきものをもとめて
はるばるのぼるこのうをとる
えび

蝦

かぐはゝ大みず川いたるところみなの門
えもとぐしきゆめ俗月俗の人をもてきる
も川をよのつなをあをつけるのなど雨ながら
ぐきるをメぐしふるもの品をきくうるをて
大をものもちゆ川をてのぐちゆみ孔て
ろうをゆつをハをたなぐしきろ
ゆやゝんをゆうみて品のいをかをいづ
ぐをうをいづ

ちゝのうをとゝのうをぶ
をゝ

ゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
ゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ
ゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ

ちはやぶる神のいさめの
ことばかは
ちはやぶる神のいさめの
ことばかは
ちはやぶる神のいさめの
ことばかは

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

奥山霜

[illegible]

る人へ奥山さかみちぬ[illegible]
しるべあるまでぞ[illegible]
[illegible]
[illegible]

無酒意猶冷とあるを引て此第三句勝地
尋ねへといふべし人の跡なるまやとなれ
ども古今和歌集などにかかる句ある
をもて人まぎれの山伏とらざる
人はなしと苦家けものとあくまでもいふべ
きいつるを又ひとりなる此句作のをもてなべて
こは秋山寂々葉零々麋鹿鳴音数處聆と
あるこゝろの中に流々水鳴音聆あを
つゝをとはなどいふべき勝地尋来
きくこゝろのうちとまりけるそいふ

もとて世俗踏分ていふあるたはぶれ
化をそのこゝろはの二句をたゞ
ぶかりしばらの二句はの二句をたゞ
こゝろをあるすべをいふべきを今を一
ふしをいふ句なのたゞこゝろばかりに
なくあるこゝろのをいふる日長夜短
懶晨興夏漏遅明聽郭公哺取詞人偷交筆
文章氣味與春同こゝろ風のまぎ
なりのこゝろの和こゝろ日人ぶいひとい
涼風急扇物先哀應是為秋氣早来壁蛬

家々音始テ亂レ叢芽處々萼初開なごのうぐひ
いづくはの二ゐ山の間さかりなびきたれぬ
菅家はのとはやもわのうへあやめのほ
はのことをきくに人のこゝろのうるをとゝ
新つけまくとかくこゝろかるを
和泉らめくこ
同右近ゆきとゝまをぶらひて人の今月
をしくもうるし拾おこゝ中院女御の二まを
うぐとうつのたつこゝろいつばりかる
うぐをを拾ゆびてはこゝ人の拾月

四討をうて今ゝをんるを拾ゆる心新つきを
はけ今ぶをとふおれ知をとゝるを三ゐ院なを
はゝ月ゆしをゝあるを山ゐかゝ八
をのをゝてをゝらをのゝふぶゝあるをつぶ拾を
はをて人をゝゆしをゝぶ人ゐぶをを
はぼゝ月ぶをゝうゝゆまゝをゝ拾ゆゝんを
まゝゝぶをゝを月ゝをゝ人ぶ古のゝゝ月
ほをゝふをゝゝるゝ月ゝゝゝゝゝゝ月の
ゝゝゝのゝ月をゝをゝゝゝ人ゝ月をのゝゝ月ゝ月
ゝゝゝゝぶゝゝて拾をなゝゝゝ人のをゝゝをて

きこゆほど聞こえを思ひさだ
めたりとそこそこえぐらさきとうぐめん
けぐらをやくつまとそこそこを言のこは
こゑくせこそこそとやこそこそいふかの今宵
ものこそ聞ちのこそこそ人なこそこそ伝をこそこそ
らくぐしけぶのの物をなしこそこそ
ちねこ目ぐらはわうなの物をなきてらぐ
人の今をなぐこそこそ伝ひこそ
こそ人をかくこそゆりてけぐこそ物をわれ
まをぐらこそこそ物をこそこそ

元帥の物をれうこそみをしかこそつまの松
山はこそぐこそこそ伝ひこそふぐのこそ目ぐはぐ
おこそれのこそこそ人をこそけこそこそぐ
ふふしこそおのこそ物をなぐこそこそ
なこそこそ詞こそこそ
こそこそ人のこそぐこそこそ
けこそこそこそ風をこそこそ物
こそこそこそこそこそこそ
こもこそこそこそこぐこぐこぐ
こぐこぐこぐこぐこぐこぐ

かくるる門人許もあるべきてうなれども
このことを論ひごとは畢竟詞のかちて
うるはしきをいとはるべきなり
いうこと拾遺集にはつゆなれども大和物
語の男のつれづれと行てうしろ見ど
つれなくのちまゐりくるほりれはべるの
なるしたをつきて詞とはいまはるべきゆ
伊勢物語の業平朝臣の除大和守ありし
ときのものの限なるのどくいとあやし
ある一段のりみけるつれづれの余ふ

つきて入けるをりの事なんとおもひてうえ
をやうの詞をあり入えきまきらはへ
ゆるしたるもかてにかなるべ
中小今なるほの二つはゆきてそこ他
まる詞の題をしたはゆ絵をばなぞ
方人(カタウド)となること

大江山

同小野宮殿行幸のみこそれば
ぶるもつくびあまの門ぶて金葉集雑上端詞書ゆて
詠百首の歌離別有る所保昌丹後守ありて

[illegible]

[illegible]

[illegible]

うゑうゑいしばくてものうるほゆめなどやうに
ものたるこゝろのとゝひまどゝてうんやハうれを
服よくうんていくんやハうハ服あり衫ハ衫服
あるべし袷ハ浴衣あり寝ハ寝衣
あるべしやこの袷ハ浴ハ寝ハ
れるれをもひうんでどしばせまあ
ものハけうのあうて為ていめなる糸刈毒
迄やついぶふうん初ようせたるのハものを
袷ぜられうふ明月花のみをもてはこと
ぶぐるものようてはあるへて示迄やあれば

えりなどふやてゆくれあどうれば
ものもゆうく撰ましなねばげるるばやあば
ゆうもへうりうくあるうけるひるる一日為
てゆくれるハるふなるるば命の儀ハ必しも
ふうの卒爾なるるあるで躁くなる心ハ定め
好くるとゆかくれなるべしそれハ人のぶる
大方うのうん名誉あるを筆れを修ハるも
世ての体心とゆるるうきるるなるなるる為
ハ名ハあるくハ名今のふあるる四行作為為為
の仰ふ国防国行道倍毎のなど教上りるて

八仲秋名月撰筆とて八月後の筆成とあるの
ものの形ひ対するさ考、関ばかりまでもなく世
にすくれたる人のうたとしてえばえ少々人
出るものなりてもきたのなれば、やがてうた
うたをなけるものなりて、八上八小町
伊勢物語、歌枕、やがて基俊俊頼
当代にて八後成西行慈円蓮念人民にて
八貴族の人などなる名人にてうたもく秀
逸多きゆゑ中うたをぬき出されたる一首
一首の題ごとに詞のあるも俗ぶりのもの

にてのうたのはしにふたみのあるまたいふにや
あらんなどもいへりとあるハ古の心にて
まことにハ十分の精選也よしみる撰花
うたまきを人れおきて一首づゝ出んな
いうぶずうたおもしろきもぞこと
うたうたんを当世ぶりとも我ぶりとも
ちがへこゝにハ未出るまとの万代集撰
など何りうたうたんとなるべきぶりの論へ
もとるべきうたの俗のうたなれるべく
なるべし

ゆるしに男をもとめ
ぬるだくちみをもり紙のひとつを
四海をもふるひ
まぐれくなりけるとうへをあつめて
日ごとにあそこびのくるしがうせもちを
ものそもくしの毒もなのをあかぐろちぬ
ふくてをうくなりめまばを酒のめるぐ
ゆるちびくそ男しるびてまりしてみ
やうはせ中からそなるもしなのれ川
をもなけてんりあうこうまれをすの
ちもそのうちせをもへそうそなるどを

なぶて男をくなりけばまがいのやうにほるく
ものはなのふくふ人をくを人せのをしるるあ
をうをもしぶたせのをうをるれかく
をぬをくなりてんはせのくなびにほををはる
蓮のうをくをうわびはをへをふをれ
ていぶみをうひはををもはるをんふぶかをれ
つやをくをてやをををはるおるく
中をり紙二みをうをくでを男の人をあを人
ゆくけ紙一男ををををよ酒のうをけを。
うてびびをんまをれををひをもをゆん

行ん一分おとれ一毋そてハうらひとそはぜそ
ぼ　あらもとものはんたまるくまま
そ　ぐあるいうぐべ　色しくはしさひほんたま
ひそ　いふをあれとおぼんまいうで二うま
の　きすどやめはひくくの世みちひ
ふ　もひふてまはでうぐはりさるるあり
ん　なぐかいくあたぐはりあそぐ男とぐりあそぐ
あ　れおぐなぐのぐひてうやう
わ　ひいうひなきぐ男ぐいくまきれ
う　ふわあくなぐうぐ今のあうとうぐ
ほ　ぐんうもうぐ

行ん　ぐうもあぐうぐ人かぐりもきうきゆきとと
ぼ　くの海くくくく

ろくしに見えてあれて見つれば大ぶみも
きこしめせとつぎ給へば酒
うるはしおかりてものいはぬ人
ちうちうどもとりてそなたへ投
ひしめくふくはかりあふ
まゆみはかりてもとりて交ハ
じくもしるものあらばものいはぬ
まぬうしろ言ひくしてのみさ
ものもふそなたへ投
ふるまうてお菓子あやに
ふるまうてものいはぬ人

ぐ
ぐ
ぐ

ゑのうへ今八文かうせきのくること
のうとびとうとうあるとうとうばまさんと
なぐふかなきそいどやをものでハほとだと
のうらひつけどそまそうてけうあうあ
しけりつをうとうふそれどやあるうふ
ふる術つきけりめうとうぶやうふ
なきけりうとうむ